

年間第 22 主日福音メッセージ  
(マルコ 7:1-8 ; 14-15 ; 21-23)

外から入ってくるもので、人を汚すものはありません。

ファリサイ派や律法学者は、法律や外面的なこと、伝統などに強くこだわる宗教指導者です。さらにイエスが嫌悪したのは、彼らが法律の表面的な見方や理解を人々に厳しく押し付け、思いやり、愛、慈悲という法律の精神を無視したことです。律法は人々を高揚させ、神に近づけるためのものですが、これらの指導者たちは、貧しい人々や疎外された人々に負担を強いるものでした。さらに悪いことに、これらの指導者たちは、自分たちにとって都合が悪くなると、律法に従うことを言い訳にしてしまうのです。イエスが彼らを偽善者と呼んだのも不思議ではありません。

イエスはイザヤ書 29 章 13 節を引用して、口先だけで伝統を守ることに熱心なパリサイ人や律法学者の態度を、虚しいものとみなして要約した。明らかに、イエスは外面的な清潔さにはあまり関心がありません。むしろ、人の心の中にあるものを見ておられます。

心は、生物学的な生命の中心であるのと同様に、私たちの精神的な生命の中心でもあります。私たちの思考は心から来ています (ルカ 9:47)。また、私たちの願望や恐れは心から生じます (マタイ 5:28、ヨハネ 14:27)。だからこそ、イエス様は「心から悪い考えや欲望、その他多くの望ましくない行動が生まれる」と力説されるのです。このように、私たちは外からではなく、内から罪を犯すのです。

手を洗うことは、体の健康を保つためには良いことですが、精神的な健康とは関係ありません。罪を避け、純潔を保つためには、神の戒めに従わなければなりません。その最大の戒めとは、神を愛し、自分を愛するように人を愛することです (マタイ 22:34)。確かに、体を清潔にすることは大切ですが、それよりも、心や精神を邪悪な考えや罪深い欲望から守ることの方がはるかに大切です。

ウィル神父